

銀座の百貨店で 働きはじめ

就職につぎつぎ

山口県の消費生活センター（1970年8月設置）には、卒業論文作成のために何度も訪問した。ここで働くのも面白いと思い、当時、東京の東銀座にあった日本消費者協会を訪ね、消費生活コンサルタント養成講座の受講を希望したが、「30代後半になったらいろいろしゃべれ」と言われ断られた。

1972年の秋、阪急百貨店（大阪本店）の面接で出身地の話で盛り上がり、「東京に行かないか、数寄屋橋阪急で採用しよう」となった。銀座！ 中学時代にNHKテレビで見た「若い季節」の世界（※1）。

銀座5丁目の数寄屋橋阪急

数寄屋橋阪急は、数寄屋橋の東芝ビルの4階までを借りていた。若い女性向けのおしゃれなお店だった。向かいには日劇や朝日新聞社があり、その裏手に関西風の安いうどん店があった（今の阪急百貨店はそれらの跡地）。

1973年4月、配属されたのは3階の服地係だった。当時は気に入った布地を買い、ミシンを踏んで自分で洋服づくりをする人も多かった。物差しで布地をはかる、箱の包装紙がけなど初めてのことがばかり。数寄屋橋阪急は先駆的な経営をしており、制服なし、ボーナスなしが高給。新卒でも企業の内見会に出かけていた。札幌や神奈川県茅ヶ崎から来た人とも友達になり、面白い職場だった。

しかし、東京は1日中音がこもり、空は暗くならない。水道水も臭い、なにより驚いたのは川、池などの水が透明でないこと、テレビ

の映像ではわからないことだった。

秋になると、3階フロア全体をみる総務のような仕事も担当するようになった。ボタン屋さん、高級ブティックもあった。苦情相談も担当した。苦情内容をノートに記載し自店内で使える金券で対応した。

冬になると、1階フロアに黒の毛皮のコートがずらりと並んだ。冬は寒かったが、太平洋側のからりとした青空には驚いた。

1970年代前半から半ばにかけて、銀座ではハンバーガーショップがオープンしたり、歩行者天国がはじまったりしたが、若者は六本木のデイスコから渋谷へ。渋谷では公園通りに小劇場 渋谷ジャン・ジャンができ（高橋竹山さんの津軽三味線は忘れがたい）、パルコもでき、数寄屋橋阪急から見学にも出かけた。

上京当時は横浜の母方の祖母・叔母宅に同居していたが、1カ月後、東急東横沿線にアパートを借りた。駅が近くその間に銭湯があった。電話は公衆電話、山口県までかけるにはお金がかかりすぎる。もっぱら手紙の時代だった。すしづめの満員電車、窓越しに見る多摩川の堰は泡立っている日もあった（※2）。

数寄屋橋阪急は1年余りで退職することを決める（1年ごとの更新制）。

行きたかったところ

東京に来て行きたかったところは3カ所あった。足尾銅山、成田空港予定地、東海村……足尾銅山近くの渡良瀬川の土手はまだ赤茶けていた。

1974年5月のある日、新聞に「消費者大学」講座（財・消費科学センター）の案内を見つける。講師のひとりに見田宗介さん。『現代日本の精神構造』を著した新進気鋭の若手社会学者だ、お話を聞きたいと思った。

※1 女性の就職活動の難しさなどをなんとかしたくて、1975年の国際婦人年の取り組みに市川房枝さんらと国際婦人年連絡会として活動することになる。

※2 洗濯機の普及とともに登場してきた合成洗剤については、安全性、環境汚染が問題となっていた。1979年、滋賀県は琵琶湖の水質悪化の原因として合成洗剤の販売・使用を禁止する条例を制定した。石けんへの切り替え、普及活動はいまでも続いている。